千葉科学大学紀要，17，30-37，2024
【原著】

行政保健師が地区活動を成功させる方略

Strategies for successful community activities of public health nurse

髙橋　玲子

Reiko TAKAHASHI

目的：行政保健師が地区活動を成功させる方略を明らかにすることである。
方法：一県内の行政保健師に対して、半構造化面接を行い、データを質的帰納的に分析した。
結果：研究参加者は4名で、保健師経験年数は6年から23年であった。地区活動を成功させる方略には【住民との信頼関係の構築】、【看護技術の提供】、【住民主体の活動促進】、【住民・関係機関や地区組織との協働】、【地区活動を支える組織づくり】、【地区活動を推進する職場環境】があった。また、地区活動を成功させた保健師は【住民の健康を守る責任感】、【保健師としての生きがい】を感じていた。
考察：地区活動を成功させるためには、地域に出向いて住民との信頼関係を構築すること、住民主体の活動を促進すること、住民・地区組織・関係機関と協働することが重要であり、そのためには、保健師が住民の健康を守るという責任感と地区活動の喜びを感じられるような人材育成、職場環境づくりが必要であることが示唆された。

Ⅰ．緒言

従来、行政保健師は、市区町村をブロックにわけ、受け持ち地区をもち（地区担当制）地区活動を行ってきたが、1994年の地域保健法の施行や2000年の介護保険制度の導入により、都道府県は精神保健や難病対策、市町村は母子保健、成人保健、高齢福祉、障害福祉の事業中心の業務担当制が主流になった[1)]。業務担当制は、その領域の専門性を高め効率的な業務運営が可能になるが、地域住民の健康や地域環境を俯瞰することが弱まり、地域全体の健康課題を把握することが難しいと指摘されている[1)]。

このような背景から、2013年に国は「地域における保健師の保健活動に関する指針」において、「地区活動に立脚した活動の強化」及び「地区担当制の推進」[2)]を盛り込み、改めて地区活動の重要性を強調している。

地区活動とは、「地域の健康格差を縮小させながら、健康水準の向上をもたらすために一人ひとりの健康問題を地域社会の健康問題と切り離さずに捉え、個人や環境、地域全体に働きかけ、個別はもちろん地域の動きを作りだす活動である」と定義されている[3)]。また、保健師が一定の地区内に居住するすべての住民の健康に責任を持

連絡先：髙橋　玲子 retakahashi@cis.ac.jp
千葉科学大学看護学部看護学科
Department of Nursing、 Faculty of Nursing、 Chiba Institute of Science
(2023年10月2日受付、2024年1月22日受理)

ち、受け持ち地区の住民の健康を守る活動である[4]。地区活動では、住民の健康意識の向上、住民の主体的な問題解決の実現、住民が必要とするヘルスケア資源の活用と組織化を目指す[4]。

地区活動に関する先行研究では、地区活動はコミュニティエンパワメントを目指す支援であり[5]、住民組織のコミュニティエンパワメントの過程を評価する質的評価指標[6]や住民組織が地域づくりに発展するための保健師の支援内容[7]が明らかになっている。松本[8]は、住民の互助活動を行うソーシャルキャピタルの醸成を図るための保健師のスキルについて、「健康課題の把握」「地域の声を聞く」「人と人とをつなぐ力」が重要だと述べている。また、麻原ら[9]により、地域アセスメント方法や地区カルテなどの実践的なツールが開発されている。

しかし、地区担当制をとっていても、「地区把握ができていない」「健康づくり、地区組織活動ができない」などの理由で効果的な地区活動につながっていない現状にある[10]。そこで、地区活動を行っている保健師から工夫していることや課題解決方法などを把握し、地区活動を成功させる方略を明らかにする。

Ⅱ. 研究目的

行政保健師が地区活動を成功させる方略を明らかにすることである。

Ⅲ. 用語の定義

「地区活動が成功する」ことを「地区活動によって地区の健康課題の改善に繋がったこと」と定義する。

「地区」は、市全域、小学校区など各自治体が担当地区と定めている範囲と定義する。

「方略」とは、地区活動を成功させるために行った工夫や課題解決方法と定義する。

Ⅳ. 研究方法

1.研究デザイン

地区活動を成功させる方略を、保健師の認識や経験の語りにより導き出すため、質的記述的デザインを用いた。

2.研究参加者

研究参加者は、地区活動を成功させた経験のある行政保健師4名である。選定方法は、A市があるB県内の範囲とした。地区活動が成功した経験に関しては、B県が作成している保健師活動状況の中で、計画書に地区活動が行われ、健康課題の改善につながったと考えられる記載があった自治体の保健師2名と看護系大学の教員から地区活動が行われ、健康課題の改善が図られているとの情報が得られた保健師2名のうち、研究に同意が得られた者である。

3.データ収集方法

データ収集期間は、2019年10月～11月である。研究参加者に対し、インタビューガイドを用い、地区活動を行うきっかけとその内容、成功させるために工夫したこと、地区活動を行ううえでの課題とその解決方法、組織体制、保健師にとっての地区活動の意義について、半構造化面接を行った。

4.分析方法

質的帰納的分析方法を用いた。インタビューの録音データから参加者ごとに逐語録を作成し逐語録を繰り返し読み、全体像を把握した。そして、地区活動のきっかけ、地区活動の内容、地区活動を成功させるために工夫したこと、地区活動を行う上での課題、その解決方法、地区活動の組織体制、保健師にとっての地区活動の意義の7つに当てはまる文章を抜き出し、意味のあるまとまりで区切りコード化した。コード化する際には可能な限り研究参加者の言葉を用いた。4名のコードの相違点、共通点を比較することによって分類し、分類したものに共通する名前をつけサブカテゴリとした。次にサブカテゴリを共通性で整理し、カテゴリを作成し名前をつけた。データの分析は、データの要約及びコード化の段階で再度、研究参加者に発言内容との相違がないか確認してもらうことで信頼性を確保した。筆者と保健師活動に精通した大学院の指導教授により行い、副指導教授によるスーパーバイズを受けることにより分析の妥当性を確保した。

Ⅴ. 倫理的配慮

本研究は、千葉科学大学大学院看護学研究科倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号No. 19-1）。

対象者の所属機関の長に承諾を得た後、研究参加者に、文書で、研究の主旨・意義や方法、倫理的配慮について説明した。研究参加は自由意志によるものであり、参加拒否や・中断の権利が保障されていることを説明し同意書に署名してもらった。

Ⅵ. 結果

1. 研究参加者と地区活動の概要（表1）

研究参加者はB県内の3市の保健師で、年齢は20歳～40歳代、保健師経験年数は6年～23年である。地区活動内容は、ご当地体操の開発による健康増進が1名、健康づくりや介護予防のための体操グループ育成（継続支援を含む）が3名であり、4名とも体操を通じた健康づくり活動であった。インタビューの回数は1回で時間は平均67分（58分～83分）であった。

2.地区活動を成功させた方略に関する分析結果（表2）

研究参加者の語りから分析した結果、51のコードが得られ、20のサブカテゴリを抽出し、8のカテゴリに集約された。カテゴリごとの内容を以下に示す。以下、カテゴリは【　】、サブカテゴリは＜　＞、コードを≪≫、研

表1　研究参加者と地区活動の概要

研究参加者の概要	地区活動の手段	地区活動内容
A（女）30歳代　保健師経験年数10年	体操の自主グループ育成・継続支援	A保健師は、高齢者福祉部門に異動した年に、住民主体の介護予防体操の会が作られたきっかけや、継続できる理由を知りたいと思い、体操のグループ参加者に話を聞いた。その結果、住民の口コミがきっかけとなり体操の会が作られ、自分たちでお手玉など楽しめる内容を取り入れることで会が続いていることがわかった。そこで、A保健師は会の交流会を開き、参加者が楽しめるプログラムの紹介を行うなど住民から学んだ方法を住民に還元し、参加者のモチベーションの向上を図っていた。また、A保健師が住民の口コミによる周知を推進したことにより、これまでグループがなかった地区から新たにグループができる見込みである。
B（女）40歳代、保健師経験年数18年	健康増進のポピュレーションアプローチ	B保健師は、高齢者福祉部門で介護予防体操を考案して広め、その経験を生かし、健康増進部門に異動してから子どもから大人までの若い頃からの健康づくりを目的にしたご当地体操づくりを行った。体操を作る過程で教育委員会に相談し、小学生の運動面の課題を教育委員会、小中学校、大学などの関係機関と共有し、一緒に体操を作成した。小学生から歌詞を募集するなどの工夫により、地域に愛着がもてる体操にした。市長をはじめ、教育委員会、PTAなどにPR用動画作成に参画してもらった。小中学校、保育園が運動会でこの体操を取り入れた。
C（女）20歳代、保健師経験年数6年	体操の自主グループ育成	C保健師は、市の保健事業の参加者がほとんどなく、地区の健康課題が十分把握できていない地区を担当することになった。そこで、学生実習を活用して住民にグループインタビューを行った結果、住民から「以前から地区で体操の教室を開きたいと思っていた」との提案があり、自治会長などが協力して住民が体操の会を作ることになった。C保健師は住民自身の手で会を立ち上げられるよう関係者とともにリーダーとなる住民を支援し、地区に初めて住民による体操の会ができた。さらに参加者からお茶会を作りたいと意見があり、住民主体の高齢者の交流の場が作られた。保健師と地区の人々の繋がりができた結果、市主催のイベントに大勢の住民が集まった。
D（女）40歳代、保健師経験年数23年	体操の自主グループ育成・継続支援	D保健師は、ラジオ体操普及事業について、参加者の伸びが停滞しており、取り組みを見直す必要性を感じていた。参加者に質問紙調査行った結果、 ラジオ体操は束縛やしがらみの少ない人と人とのつながりとしてソーシャルキャピタルの醸成に効果があることがわかった。また、男性の存在がグループの維持に大きな役割を担っていることから、男性を増やす取り組みを行うことにした。住民代表で構成される連絡会に相談し進めたことで、メンバーから、「目標が整理されたので検討しやすい」と大きな反響が得られた。さらに、 D保健師が参加者の写真をPR用チラシに掲載したことから、住民が自分たちの活動を行政が後押ししてくれたと感じ、メンバーの喜びにつながったと語った。ラジオ体操の効果を広く住民にPRしたことで参加申込みが増加した。

究参加者の語りを「斜体文字」で示す。

1）【住民の健康を守るという責任感】

保健師は、≪健康づくりには、ソーシャルキャピタルの醸成が大事だということを広める活動をしたい≫といった＜住民の互助活動が大切であるという保健師の経験と思い＞、＜担当地区の様子や住民の考えを知りたいという思い＞、≪前任者の方法を踏襲し行うことで職員が疲弊したため、活動の見直しをしたい≫など＜事業を見直す必要性の認識＞の住民の健康を守るという責任感を感じていた。

2）【保健師としての生きがい】

保健師は、≪自分の活動に自信が持てた≫、「資料やグラフ作成などを面白いと思い得意なんだと気づいた」という≪自分の特異な点を発見した≫、≪地区のことをよく知ることで、住民から地区の保健師と認識され、うれしい≫と感じ、＜地区活動から得られる喜び＞から、保健師としての生きがいを感じていた。

3）【地区活動を推進する職場環境】

保健師が所属している職場は、≪地区活動が熱心に行われている職場環境≫があり、＜地区活動が保証されている組織体制＞であった。また、「事務職上司が保健師の地区活動を理解し、活動に参加したりサポートしてくれることで自分が認められたと感じ、考えた通りの活動ができた」という≪自分を支えてくれる人の存在が大きい≫、≪先輩保健師は地区活動を盛んに行っていて自分もそうなりたい≫といった＜地区活動を行う先輩や支えてくれる人＞がいる職場であった。

4）【住民との信頼関係の構築】

保健師は、≪地域を歩いて知り住民と仲良くなるため、ど＜地区に出向き住民と顔を合わせる＞ことを行ってい

表2　地区活動を成功させた方略に関する分析結果

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
住民の健康を守るという責任感	住民の互助活動が大切であるという保健師の経験と思い	訪問看護の経験から地域の人の支援が大切だという考えが基盤にあった
		地区住民を大切にし、地区をよくしたいという気持ち
		地区に出られないと考える保健師が体操の普及という手段で地区活動に取り組んでほしい
		健康づくりには、ソーシャルキャピタルの醸成が大事だということを広める活動をしたい
		事務職上司と取り組んだヘルスプロモーションの理念に基づく地区活動の経験が原点になっている
	担当地区の様子や住民の考えを知りたいという思い	介護予防を切り口に市全体を知りたい
		健康ニーズがわからない地区なので学生実習を活用し、地区の様子を把握したい
		体操グループの参加者の考えや気持ちを知りたい
		住民の考えを聴き、地域に出向いて相談に対応したい
	事業を見直す必要性の認識	事業の見直しを進める意見が出ていた
		前任者の方法を踏襲し行うことで職員が疲弊したため、活動の見直しをしたい
保健師としての生きがい	地区活動から得られる喜び	住民が楽しく取り組めるように考えるのが自分の楽しみ
		地区のことをよく知ることで、住民から地区の保健師と認識されうれしい
		自分の活動に自信が持てた
		自分の得意な点を発見した
地区活動を推進する職場環境	地区活動が保障されている組織体制	地区担当制をとり、地区活動が行われる体制がある
		地区活動が熱心に行われてる職場環境がある
	地区活動を行う先輩や支えてくれる人	自分を支えてくれる人の存在が大きい
		お手本となる先輩がいた
		先輩保健師は地区活動を盛んに行っていて自分もそうなりたい
住民との信頼関係の構築	地区に出向いて住民と顔を合わせる	地域を歩いて知り住民と仲良くなるため、アンケートは郵送せずポスティングした
		地区に出向き地区の様子を知り、生活の場に入って支援する
		地区活動をする保健師を増やすため地区に出向く機会を作る
		高齢者と信頼関係を作るため保健師の強みをいかして訪問し顔を覚えてもらう
	地域を知る	前後のたわいもない会話など相手に合わせて地道に活動する
		幅広く情報収集するために、自治会長、民生委員、住民に相談し訪問とグループインタビューを行った
		体操の会の参加数や回数、継続年数、体力測定の結果を把握する
		地域の人を大切にして普段の業務を通じて地区の情報を得る
	地区のキイパーソンとの関係の重視	地区の人にインタビューする前には、地域で権限のある人に了解をもらった
		地域のキーパーソンとの繋がりを大切にし、相手の困っていることろに働きかける
看護技術の提供	看護技術の提供	子どものころからの健康づくりに取り組むために体操を普及する
		介護予防手帳の作成や介護予防推進員の育成を行う
		保健師が専門職とともに効果的な体操を考案する
		担当地区の地域環境と体操グループの参加者の個別の健康課題を関連させてデータ分析し必要な支援に繋げたい
	活動の効果の伝達と啓発	住民に体操の効果を伝えることにより、子どもからの健康づくりの大切さを啓発する
住民主体の活動促進支援	地域住民主体の活動グループの育成	体操グループを始めたい住民を地域の関係者と一緒に支援する
		地域づくりを目指し、地域に住民が作る体操の会を増やす
	住民やリーダーとなる人への後方支援	保健師だけでなく、地域包括支援センター、社協などを誘い体操の会のリーダーを支える協力体制を作る
		負担軽減などリーダーとなる人の支援を行う
	住民同士のつながりをつくる	住民が主体になり、住民同士のつながりを広げる支援をする
		住民同士のつながりで、グループを増やす
	住民が主体となる活動の維持	グループ継続のために交流会を設定したり、高齢者が楽しいと思える活動を紹介する
		住民たちで課題解決ができる力をつけてもらう
		住民が主体的に健康づくりに関する自分の意見を表出する
住民・関係機関や地区組織との協働	大学との協働	大学の教育、研究、地域貢献の機能を生かし、助言や協力をしてもらう
	住民との協働	子どもや農家など体操を普及したい当事者に意図的に体操づくりに携わってもらう
	住民組織との協働	民生委員や自治会長を通じ体操の会の周知をしてもらうことで地域に広める
		住民代表の組織に了解を得ながら具体的な方法を決める
	健康課題の共有と関係機関の特徴を踏まえた対応	子どもの健康課題を共有し、教育分野の特徴を捉えた効果的な働きかけ
地区活動を支える組織づくり	上司への地区活動への協力依頼	組織内で理解が得られなくてもあきらめず、周囲に味方を作り、上司に後押ししてもらえるよう工夫する
		仕事量の調整や負担感の軽減のために上司に早めに相談し、同僚に協力してもらう

た。また、「学校や果物農家など様々な人への聞き取りを行い、少しずつ種をまくように体操をPRしたことで大きな波及効果があったが、体操をつくる前後も含めて、住民や関係者とのたわいもない会話が地区活動では重要」という≪前後のたわいもない会話など相手に合わせた地道な活動≫、≪地域の人を大切にして普段の業務を通じて地区の情報を得る≫など＜地域を知る＞ために、住民の声を聞き、地区の情報を把握していた。また、「体操の依頼によって出会う地域のキイパーソンとの繋がりを大切にし、キイパーソンとなる民生委員に介護予防の大切さを伝えるときは、相手の困っていることに働きかけた」ような＜地区のキイパーソンとの関係の重視＞して住民との信頼関係を構築していた。

5）【看護技術の提供】

≪保健師が専門職とともに効果的な体操を考案≫、≪担当地区の地域環境と体操グループの参加者の個別の健康課題を関連させてデータ分析し必要な支援に繋げたい≫など＜看護技術の提供＞、≪住民に体操の効果を伝えることにより、子どものころからの健康づくりの大切さを啓発する≫という＜活動の効果の伝達と啓発＞を意図的に行っていた。

6）【住民主体の活動促進支援】

≪体操グループを始めたい住民を地域の関係者と一緒に支援する≫ことで＜地域住民主体の活動グループの育成＞を行い、≪保健師だけでなく、地域包括支援センター、社協などを誘い体操の会のリーダーを支える協力体制を作る≫ような＜住民やリーダーとなる人への後方支援＞を行っていた。さらに、「これまで母子や病気の人への訪問や老人クラブに行くなどことが地区活動だと思っていたが、地域の人が主体になること、穏やかなつながりで活動することで健康づくりが広がることがわかったので、保健師はそれをサポートし、行政の立場で応援してくことも地区活動だとわかった」というように＜住民同士のつながりをつくる＞ことを行っていた。また、≪グループ継続のために、高齢者が楽しいと思える活動紹介≫し、「交通手段がない人も自分たちで工夫してきてもらい、集会所使用料も住民負担にしている」と≪住民たちで課題解決ができる力をつけてもらう≫ようにしていた。「自治会長に遠慮して自分の意見を言う人が少なかったが、参加者が『体操の会ができてよかった、本当は運動を大切だと思っていた』と保健師に話してくれるようになった」という≪住民が主体的に健康づくりに関する自分の意見を表出する≫など、＜住民が主体となる活動の維持＞が図れるような支援をしていた。

7）【住民・関係機関や地区組織との協働】

≪大学の教育、研究、地域貢献の機能を生かし、助言や協力をしてもらう≫ような＜大学との協働＞や≪子どもや農家など体操を普及したい当事者に意図的に体操づくりに携わってもらう≫ように、意図的に住民に参加してもらう方法で＜住民との協働＞を行っていた。さらに、≪民生員や自治会長に体操の会の周知をしてもらうことで地域に広める≫、≪住民代表の組織に了解を得ながら具体的な方法を決める≫といった住民組織に役割を持ってもらい、承認を得る方法で＜住民組織との協働＞していた。また、「学校で打ち合わせをしたり、教育委員会と連携することは、管理職となる先生と知り合いになることもでき、先生が協力してくれることの波及効果は大きい」と≪子どもの健康課題を共有し、教育分野の特徴を捉えた効果的な働きかけ≫により＜健康課題の共有と関係機関の特徴を踏まえた対応＞をしていた。

8）【地区活動を支える組織づくり】

「上司に保健師活動を理解して背中を押してもらうことが大切なので、積極的な同意が得られない場合は承諾を得ながら取り組む」ように≪組織内で理解が得られなくてもあきらめず、周囲に味方を作り、上司に後押ししてもらえるよう工夫する≫≪仕事量の調整や負担感の軽減のために上司に早めに相談し、同僚に協力してもらう≫ことをしており、＜上司への地区活動への協力依頼＞により自ら地区活動が推進できるような組織づくりを行っていた。

Ⅶ. 考察

1． 地区活動を成功させる方略

1）地域に出向いて住民との信頼関係をつくること

研究参加者は、＜地区に直接出向き、住民と顔を合わせる＞ことを重視し、≪地域のキイパーソンとの繋がりを大切にし、相手の困っているところに働きかける≫ことで、住民とのつながりを深め、信頼関係を構築していた。山下[11]は、生活者である住民と直接関わり、住民と自然な関係を作ることで親密な信頼関係が生まれ、このような活動は地域に根を張る活動により作られ、保健師本来の基本となる活動であると述べている。近年、保健師活動は業務分担制による専門分化（分業化）が進み、狭い領域の事業をこなすことを自分の役割だと認識している保健師が増えている傾向にある[12]が、地域に出て、住民と顔を合わせて地域を知るといった従来からの保健師活動の基本に戻り、住民との信頼関係の構築を中核に据えていくことが重要である。

2）住民主体の活動を促進すること

研究参加者は、＜地域住民主体の活動のグループを育成＞、＜住民やリーダーとなる人の後方支援＞して、体操グループの発足から、継続に至るまでのすべての

過程で、常に住民が主体的に活動できるような働きかけを行っていた。東ら[13]は、成果を創出した保健師活動は、従来からの保健師の一方的な知識の提供や指導ではなく、住民や関係者の主体性や思いを重視するような「住民等の主体性の醸成」であると述べている。また、中山[7]は、地域のエンパワメントについて、住民の主体性を引き出し、住民とともに活動する支援が必要だと述べているが、地区活動においても、住民の主体性を促進する支援が重要であることが明らかになった。このようなセルフヘルプグループは、専門家の支援では及ばない住民自身の自律のための助け合いの機能をもち、共通の課題を同じ地域に暮らす他の住民に示す情報発信機能をもつ[14]ため、セルフヘルプグループの育成・支援は、地区活動における鍵となる方策であるといえる。

3）住民・地区組織・関係機関と協働すること

研究参加者は、≪子どもや農家など体操を普及したい当事者に意図的に体操づくりに携わってもらう≫、≪地区のキイパーソンなどに体操の会の周知をしてもらうことで地域に広める≫ことで、住民・地区組織・関係機関と協働していた。協働とは、パートナーシップを基盤にした活動方法の１つで、異なる立場の人々・機関は対等の立場で、目的・情報・経験を共有し、力を生かして育ち合う活動を通じ、信頼関係を強化し活動を発展させていくことである[15]。山谷[16]は、地域づくりは、住民・関係者・行政の協働による活動により、課題解決が図られ、その人らしい生き方が可能になってQOLが向上することであると述べている。保健師と住民、関係機関がお互いの専門性を認め合い、地区住民の健康づくりのために力を出し合うことで、健康課題の改善が図られることから、保健師、住民、住民組織、関係機関との協働は欠かせない重要な方略である。

4）住民の健康を守るという責任感を持ち地区活動により生きがいを感じられること

地区活動を成功させた保健師の活動には、保健師の【住民の健康を守るという責任感】と、活動により【保健師としての生きがい】が持てることが重要であることが明らかになった。小島ら[17]は、熟練保健師の地区活動は、住民のためにどうにかして地域を本気でよりよくしたいという「何とかしたい」が地区活動を展開する駆動力になっており、看護専門職としての地区活動に臨むべき姿勢であると述べているが、本研究の保健師の経験年数を見ると、新しい地区を担当して間もない保健師や高齢者福祉部門に異動した直後の保健師など、必ずしも熟練保健師や地域住民との関係性が基盤にあった保健師ではなかった。麻原ら[9]は、地区活動は保健師としての充実感、住民への愛着、住民との一体感等への効果をもたらすと述べており、新任期から地区活動の喜びや自信などを得られるような人材育成が必要である。

5）地区活動が推進できる行政組織を作ること

研究参加者の所属する組織は、≪地区活動が熱心に行われている職場環境≫で、≪地区活動を行う先輩や支えてくれる人支えてくれる人がいる≫組織であった。そのような組織でない場合は、「組織内で理解が得られなくてもあきらめず、周囲に見方を作り、上司に後押ししてもらえるよう工夫する」など、地区活動が推進できるよう上司に働きかけていた。行政保健師の所属する組織の所属長は、事務系管理職であることが多く、大森ら[18]は、保健師は事務系職員と人々の健康増進の目的を共有し、お互いに学び合い、行政組織の文化を変革していく必要があり、事務系職員に日頃から保健事業の効果を理解してもらえるような関わりが重要であると述べている。地区活動を成功させるためには、事務系管理職に、地区活動の意義や方法など理解を促進し、行政組織において地区活動の必要性が認知されるよう働きかける必要がある。さらに、「仕事量の調整や負担感の軽減のために「上司に早めに相談し、同僚に協力してもらう」ような地区活動のための業務時間を確保することも必要であると示唆された。

2．地区活動を成功させた保健師活動の構造

地区活動を成功させた保健師活動の構造を図１に示す。地域への働きかけとして、【住民との信頼関係の構築】が中核となり、【専門知識の提供】、【住民主体の活動促進支援】、【住民・関係機関や地区組織との協働】が相互に関係していた。また、自組織への働きかけとして【地区活動を支える組織づくり】があった。地区活動は、【住民の健康を守るという責任感】により取り組まれ、その結果、【保健師としての生きがい】を得て、さらに【住民の健康を守るという責任感】を深めていた。また、【地区活動を推進する職場環境】が地区活動を成功させる方略を支えており、そうした職場環境がない場合、保健師は方略として【地域活動を支える組織づくり】を行っていた。

Ⅷ. 研究の限界と今後の課題

研究参加者が４名で、対象者の置かれた立場や体験が限られていること、B 県という一部の地域のデータであることから、今回得られた結果は限定的である。今後は、本研究で明らかになった方略について、地域や対象者を拡大し検証する必要がある。さらに、過去の実践の振り返りではなく、実際に行われている地区活動の過程でこの方略の有効性についての検証が必要と考える。また、地区活動を推進する職場内教育の方

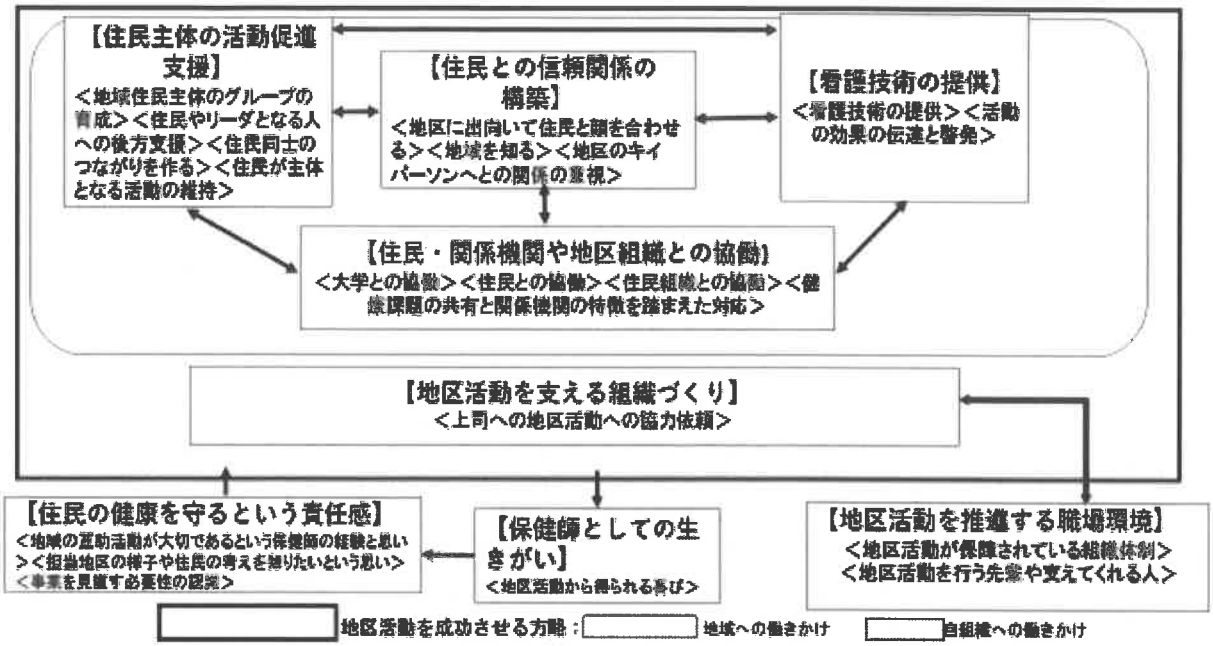

図１　地区活動を成功させた保健師活動の構造

法、組織体制に関することについては、今後さらに調査していきたい。

Ⅸ. 結論

地区活動を成功させるためには、地域に出向いて住民との信頼関係の構築を行うこと、住民主体の活動を促進すること、住民・地区組織・関係機関と協働することが重要であり、そのためには、保健師が住民の健康を守るという責任感と地区活動の喜びを感じられるような人材育成、職場環境づくりが必要だと示唆された。

Ⅹ. 謝辞

本研究にご協力いただいた関係者の方々に深く感謝申し上げます。本論文は千葉科学大学院看護学研究科における修士論文を一部加筆修正したものである。本研究における利益相反はない。

参考文献

1) 中板育美：今の時代に求められる「地区担当制」とは. 保健ジャーナル, 71(11), 911-916, 2015.

2) 厚生労働省健康局長：地域における保健師の保健活動について. 健発 0419 第 1 号. https://www.mhlw.go.jp/content/12205250/001129302.pdf, (参照 2019-09-02)

3) 佐伯和子：最新公衆衛生公衆衛生看護学テキスト第 2 巻. 医歯薬出版株式会社, 東京, 139, 2022.

4) 北山三津子：地区活動の基本と対象のとらえ方. 公衆衛生看護学総論（宮崎美砂子・北山三津子・春山早苗・田村須賀子編）第 3 版. 108-110, 日本看護協会出版会, 2021.

5) 山田洋子：住民の持つ力を判断し地域づくりに向けて活用する看護援助方法. 千葉看護学会誌, 3(2), 63-70, 2007.

6) 中山貴美子：保健専門職による住民組織のコミュニティエンパワメント過程の質的指標の開発. 日本地域看護学会誌, 10(1), 49-58, 2007.

7) 中山貴美子：住民組織活動が地域づくりに発展するための保健師の支援内容. 日本地域看護学会誌 11(2), 7-14, 2009.

8) 松本珠美：「ソーシャルキャピタルの醸成や活用にかかる保健活動のあり方に関する研究」報告書. 日本公衆衛生協会, 39, 2014.

9) 麻原清美, 大森純子, 永田智子, 鵜飼修：地域特性に応じた保健活動推進ガイドラインの開発. 厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）総括研究報告書, 厚生労働省, 19-43, 2018.

10) 佐川きよみ, 鎌田久美, 青柳玲子, 菊間博子, 岡島さおり, 山野井尚美：保健師の活動体制の現状. 保健師ジャーナル, 71(11), 904-910, 2015.

11) 山下恵：高齢者の健康度が高い地域における保健師活動の特徴. 日赤看護学会誌, 18(1), 11-18, 2018.

12) 中板育美：地区診断から始まる保健師の地区活動. 保健ジャーナ, 69(2), 96-103, 2013.

13) 東美鈴, 松田宣子：成果創出に至った保健師活動における

保健師の役割の類型. 日本公衆衛生看護学会誌, 7(2), 91-99, 2018.

14) 大木幸子, 星旦二：セルフ・ヘルプグループにおける参加者のエンパワメントの過程－炎症性腸炎疾患患者会会員に注目して－. 総合都市研究, 83, 29-45, 2004.

15) 大森純子：住民との協働による地域づくり. 公衆衛生看護テキスト第2巻 公衆衛生看護技術(佐伯和子, 麻原きよみ, 荒木美香子, 岡本玲子, 他編), 医歯薬出版株式会社, 114, 2014.

16) 山谷麻由美：地域保健活動における「地域づくり」－概念分析－. 日本地域看護学会誌, 22(2), 69-77, 2019.

17) 小島千明, 高嶋伸子: 熟練保健師の地区活動展開プロセスの特徴. 日本地域看護学会誌, 9(3), 4-32, 2016.

18) 大森純子, 宮﨑紀枝, 麻原きよみ, 百瀬由美子, 長江弘子, 加藤典子, 梅田麻希, 小林真朝：保健事業の展開において保健師と事務系職員の意見が異なる状況に関する質的分析. 日本地域看護学会誌, 9(2), 81-86, 2007.